

被災地模型から復興を考える 内藤 廣さん (建築家)

生死のあり方問い直せ



一辺四方に五百分の一の大ききで作られた白い建築模型の街々。港に船が接岸し、陸に向かって倉庫、工場、住宅が整然と並ぶ。縦横の街路には人々が活発に行き交うのさうだ。だが、その様子を想像した瞬間、背筋が寒くなる。三月十一日、これら岩手、宮城、福島島の街並みは津波に襲われ、既に存在しないのだ。

戦後、この国の建築は機能主義のモダン建築から出発し、装飾性などを回復したポストモダン建築によって彩られてきた。ように見える。これが主流ならば、内藤さんは異端だ。代表作「海の博物館」(三重県)、「天心記念五浦美術館」(茨城県)、「牧野富太郎記念館」(高知県)を見ても形態の共通点を見いだすのは難しい。共通するのは、建築家としての姿勢だ。設計前にその土地の風を読み、時を経ても古びないデザインを採用し、内部空間を重視し、現場の施工者との見える付き合いをする。そこから生まれた作品は数々の賞に輝いてきた。

「三」失われた街一展。監修した建築家、内藤廣さん(左)は模型を見ながら「不思議なメッセージを持ってほしい」と言った。

同展は、神戸大准教授の槻橋修さんの研究室が、全国十二大学の学生たちを進めてきた被災各都市の復興模型を、デザイナーの原研哉さんが震災の震度、津波、放射線、電力を視覚的に表現したデータとともに展示した。「あれほどの大震災が人々の記憶から薄れつつある。この展示で当時を思い出せるようにしたい。そして受け止めたメッセージをぜひ発

地震が起きたのは、東京大の教授としての最終講義の三十分前。副学長だった内藤さんは「建築、都市工学、土木の重要な人たちの情報共有の場をネット上に構築した」。四月、被災地に入って茫然とした。「見た光景をまだ咀嚼できない」。建築家による復興支

援のネットワーク「アーキエイド」の設立に尽力し、その活動を支えるため、五月には伊東豊雄、隈研吾、妹島和世、山本理顕と「帰心の会」を設立した。

土曜訪問

退官後、一建築家として生きるつもりが一転、復興に向けた社会的な役割を担うことになった。そうさせたのは、こんな思いがあるからだ。「この三十年間、阪神大震災や米中核同時テロの時以外は、建築や都市は人間の生死とは関係ないかのようにだった。我々は今回の震災で、建築、都市工学、土木が人間の生きる」とと死ぬことにかかわっていることに、戦後、初めて気が付いたんじゃないか」

震災によって「この国の社会構造全体が揺さぶられている」と見る。戦後の新憲法の下でできた制度や社会・経済・産業の仕組みは、建築関係法の整備とともに一九六〇年ごろに完成した。だが今、その「賞味期限が切れた」。復興案が遅々として進まないのは「戦後の社会基盤の根幹にかかわりすぎていて、政治家も役所も動けない」からだ。

岩手県津波防災技術専門委員として復興の困難さに直面している。「高層二十層の防潮堤を造るのが、今の政治家には一番楽。だけど今後百年間、メンテナンスし続けられるのか。次に起きることは目に見えている。高台に移転した人々も二世帯ほど経ると、子孫が平地に住宅を建てるようになる。そのころ、メンテナンスされていない防潮堤を破壊して津波が襲ってくる。明治三陸津波の後、旧文部省が出した通達に、高台移転などの案はすべて示されていたのです」

「どこまで遡って考え始めればいいのか。ヒントが大事なのは「生きることと死ぬことを社会のコンセンサスとして見直すこと」。ある被災自治体の長は内藤さんに、海に近い低地に街を再建したいと語った。「我々は長い間、こうやって生きてきたんだよね」という。津波という自然の猛威とともに何百年も生きてきた自負がある。そこに住もうと決めたからにはある日、津波で死ぬかもしれないが、それを了解して住む。そんな生き方もあっていいのではないか」

同展の英語表記「311:LOST HOMES」は、自分や他の人と集まって住むとは何か、「LOST HOMES」とは何かという意味を込めた。模型は我々が帰るべき「コミュニティ」のあり方のイメージ。この問いが、あの模型を見て突き動かされてくれれば……」

もはや建築だけでは答えは出せない。「人間が生きる」として死ぬことをベースに、新しい価値を、建築、都市工学、土木が力を合わせてつくる。今や社会全体がそうせざるを得ない時代なのです」(三沢典文)

\*同展は12月24日まで。日、月曜、祝日休廊。

東京新聞社の許可を得て掲載しております。無断で転載・複写することを禁じます。